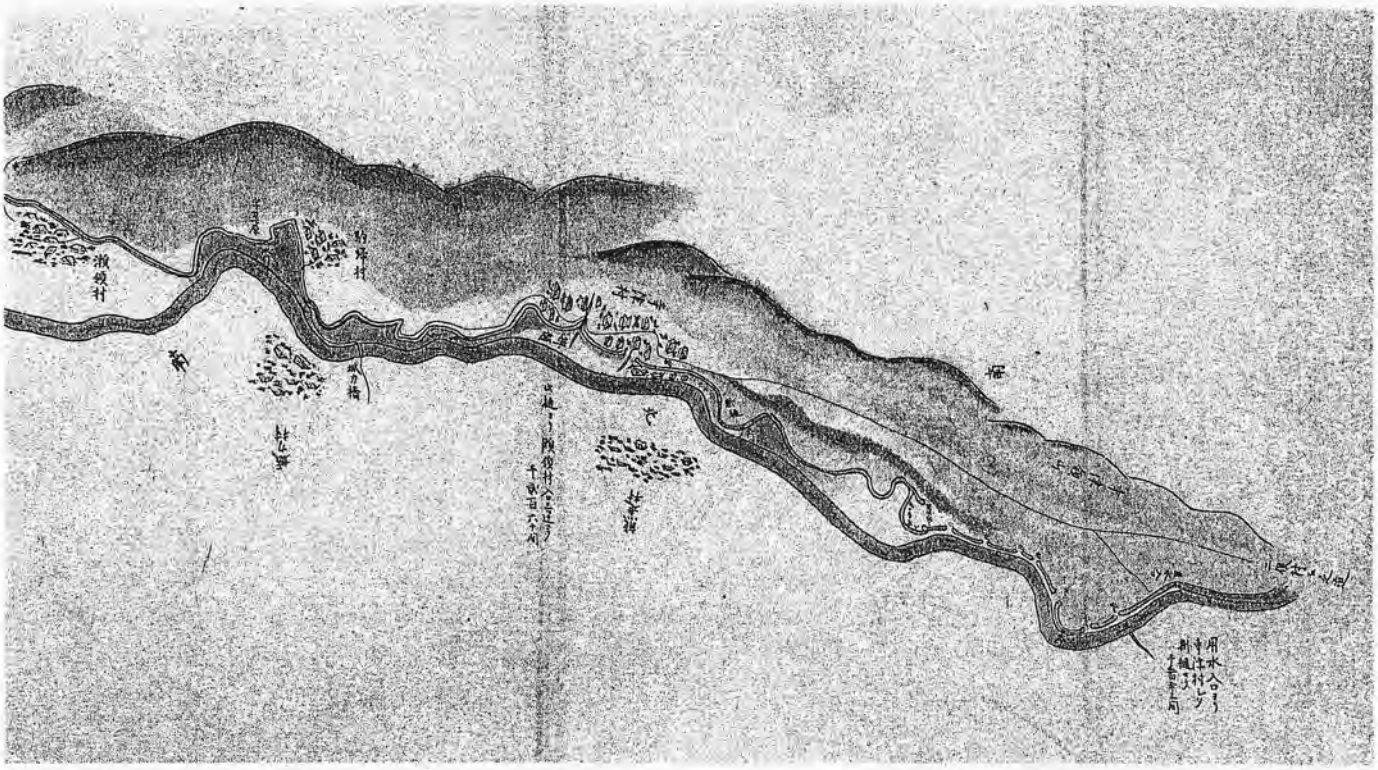
春季展

「金沢の川と用水」

展示案内

平成１２年４月～６月



金沢市立玉川図書館　近世史料館

１．犀川淵名録(16.84-58)

犀川は、金沢市南東部の山間から市街地を貫き日本海に注ぐもので東を流れる浅野川とならび市民に親しまれてきた。古くは西川、佐井川とも表記されてもいるが江戸時代の俗文などでは才川と表記している。

かつてはたびたび洪水を起こし、中でも寛永８年(1631)６月のそれは、新竪町上から流れ込んだ川水が竪町、川原町に浸水し、溺死者８０数名に上る惨事となった。

近代以降の度重なる護岸工事や、近年のダム建設により、特に市街地をとおる犀川の景観においてはかつての面影は薄れている。

この図では上流の様子が示され、あわせて付近の地名などが記されている。

２．内川淵名誌(16.84-59)

内川は犀川の支流で、三輪山(みわやま)を源流に発し北流した後、末町で犀川に合流する。

ここでは、犀川との合流地点からさかのぼる形で内川を上がり、各淵の名称、地名、橋名などを細かく表記している。

３．犀川々筋図(090-870)

１同様に犀川上流の様子を絵図により記録している。地名、村名から神社、淵名などを美しい色彩で丁寧に表している。

４．犀川大橋より大滝まで里程之覚(090-595)

江戸時代の犀川大橋から上流に向かっての距離(里程)と川渕の様子を図示したもの。

杖をつきながら渡る老人や馬を引く人の姿などわずかながら当時の犀川大橋付近の様子をうかがい知ることができる。

犀川大橋は文禄３年(1594)に前田利家により浅野川大橋とともに架設されたもので、仮橋を除けば犀川にかかる唯一の橋であり、また、北陸道の西からの関門として重要視された。

延宝年間(1673~1680)の記録に「長さ四十間(約72.8ｍ)、幅三間(約5.5ｍ)」とある。

５．加越能三州大路水経(10.0-16,261)

加賀、能登、越中の主な河川について記したもので、各河川の状態、位置、距離、歴史、付近の様子などについて書かれている。

６．金沢才川々下之景(16.84-43)

現在の犀川にかかる御影橋付近の江戸時代の様子を知ることのできる貴重な絵図。手前右方には、現在の犀川神社、対岸には石川郡中村(現在の中村町)あたりの家並を見ることができる。

犀川は現在とは異なる曲がりくねった形状が見られ、護岸対策と見られる柵も書かれている。

犀川神社は、江戸時代は宝久寺の春日、あるいは春日社と呼ばれた。これは、対岸中村の春日社の別社で、もともと犀川右岸にあった中村が市内拡張に伴い左岸に移ったときに別社として残ったものを起源とする。明治７年(1874)犀川神社に改称された。

この図は、明治３９年(1906)に手写されたもので、原本は明和年間(1764~1771)以後の製作と推察される。

なお、裏書に「此図ハ加賀国金沢市才川々下ノ景也、社ハ宝久寺ノ春日社、今才川神社、花ノ様ナルハ臘ノ木ノ紅葉ナリ後考ノ為ニ記」とある。

７．加州金沢犀川之図(写)

江戸時代末の犀川大橋付近の様子を描いた錦絵の写し。多くの人が行き交う橋の上の賑やかな様子、様々な船が行き交う当時の犀川がわかる。

野町側から見たこの図は、左方に金沢城そして卯辰山を見ることができる。

筆者として名が記されている守義については詳細不詳。

８．卯辰山開拓図絵(721.08-21)

明治初期の卯辰山を中心とした風景図として作られた版画の複製。

「甦橋(よみがえりばし)」とは天神橋のことを指す。初め仮橋であったこの場所に、慶応３年(1867)１４代慶寧(よしやす)が卯辰山を開拓し養生所を開くときに正式に架橋したのがはじまりである。当初は甦橋と呼ばれたものが山上の卯辰天満宮への参道に向かう位置にあるため天神橋と呼ばれるようになった。

絵からは明治初期の風俗がよくわかり、洋装で馬にまたがる男性と和装の人々の共存が楽しい。また、浅野川を米俵を積んで下る舟から、当時の水運の様子も見ることができる。

正月風景と思われ、凧が上がり、凧を背に橋をわたる少年の姿も見られる。

対岸の鳥居は卯辰神社の一の鳥居。

９．金沢名所－浅野川大橋より向山を望む－(K291.4-3144)

明治３０年(1897)９月発行の木版風俗絵図。当時の風俗が浮世絵風の遠近法による構成で書かれている。人力車に乗ろうとする女性や、警官の姿はいかにも明治時代らしいが電線に留まるツバメの姿が、電気が使われだしたことを意味し興味深い。

１０．卯辰山開拓録(21.2-198)

明治初年発行の木版本で慶応から明治にかけての卯辰山近辺の開拓について延べたもの。

天神橋付近之図：前出と同じく、天神橋付近の様子を見ることができる。いち早く洋装を取りいれた人と天秤棒を担いだ商人が同じ橋をわたる様子は興味ぶかい。また、卯辰山開拓によりできた常盤町(ときわまち)の町並みも見ることができる。

西御影町之図：これも前出の、現犀川神社付近の様子である。役所とあるのは「石方役所」のこと。左方には料理屋も見られ、往時のにぎわいを知ることができる。

１１．加陽武士町細見図(10.0-73)

享保１９年(1734)に書かれた、金沢の明細図、道路とともに士族の家名も記録されている。道路は黄色、用水は青色で表記されている。下方を流れるのは鞍月用水、上方は大野庄用水。

「加陽」は金沢の城下を指すときに使われたが一般的な呼称とは言いがたい。「洛陽」の表現を置き換えたとの説もある。

１２．大野庄用水之内分水一件附絵図(16.65-225)

嘉永２年(1849)に作られた大野庄用水からの分水願いにかかる見取り図。

緑灰色が既存の用水路、赤色が願い出た予定水路。

１３．辰巳用水図(観-9)

辰巳用水は、金沢城の水源確保(防火用水など)のため寛永９年(1632)小松の町人板屋兵四郎が前田利常の命により、上辰巳村より城内にひいた用水である。

これは水源からの見取り図として文化あるいは文政期に書かれたとされている。